

[編／写真]

ROBERTO CONTE

ロベルト・コンテ

STEFANO PEREGO

ステファノ・プレゴ

ソビエトアジアの建築物 SOVIET ASIA

ソ連時代の
中央アジアを
巡る記録



A MODERNIST PROJECT FOR SOVIET CENTRAL ASIA

ALESSANDRO DE MAGISTRIS

アルマトイ
カザフスタン

ソビエト連邦時代の 中央アジアにおけるモダニズム建築

アレクサンドロ・デ・マジストリス

本書では、20世紀後半のウズベキスタン、タジキスタン、カザフスタン、キルギスで展開された非常に興味深い建築および都市計画例を紹介している。こうしたプロジェクトは、当時、中央アジアを支配下に置くために総括的に行われていた「ソビエト化」の産物なのだが、このソビエト化というシステムには順応的・妥協的な側面もあった。中央政権のイデオロギーと政策が目指していたのは、暴力と抑圧、折衝と融合によって植民地化された過去をもつ、さまざまな民族と文化をひとつに統合した国家を創ることだった。

やがて、現代的な要素と伝統が共存していることを建築物に顕著に感じられる、新しい形式の社会が確立していった。本書に掲載されている建築物の大多数が造られた1960年代から1980年代にかけて、ソビエト連邦の都市部における建築モデルは、規模の大小に関わらず、大量生産システムによる計画的アプローチを基盤としていて、地元の状況はほとんど考慮されていなかった。統合、現代化、社会の統制を促進することを目的とした独特な建築文化だったからだ。モスクワ、キエフ、レニングラード、ミンスク、バクー、アルマアタ¹⁾、

タシケント²⁾など、多くの都市の新開発エリアで標準化されたデザインとプレハブ工法を用いた「均質化」が進められていくのだが、その一方で(歴史学者のエレーヌ・カレル＝ダンコースが『崩壊した帝国』に予言的に記しているように)、その標準から分岐する動きが出てくる。

現在、ソビエト・モダニズム³⁾と呼ばれている様式は、20世紀の建築史全体の流れの中でとらえると、さまざまな解釈ができる⁴⁾。西側の単純化された観点が見落としている、伝統や地理的要素に焦点をあてたアプローチからの解釈もその中のひとつだ。実際、ソビエト・モダニズムとは、非スターリン化と冷戦によって逆説的に助長されることになった技術文化交流によって後押しされた様式であり、20世紀後半の建築史の一部として考察されるべきなのだ。とりわけフランス人エンジニアのレイモン・カミュが考案したものを含むプレハブ工法⁵⁾との関連が顕著で、ソ連政府はこの技術を取得・発展させ、他の社会主義国に伝播させた⁶⁾。とはいえ、ソ連時代の中央アジアの都市開発でユニークな形態が派生したのは、特定の条件があったからだ。